

# 【平和を得るために】

ヨハネ16：25～33  
16.05.01.

▼『ごんきつね』や『おぢいさんのランプ』で知られる新美南吉に、『デンデンムシノカナシミ』という掌編があります。

全文カタカナ書きですが、ひらがなに換えて一部引用します。冒頭部分と、結末の部分です。と言いましても、これで全体の半分近い分量になります。

いつびきの でんでんむしが ありました。  
あるひ その でんでんむしは たいへんな ことに きがつかしました。  
「わたしは いままで うつかりして みたけれど、わたしの せなかの からのなかには かなしみが しばしば つまづいて いるではないか」  
このかなしみは どうしたら よいでしょう。  
でんでんむしは おともだちの でんでんむしのところに やつていきました。  
「わたしは もう いきてゐられません」  
と その でんでんむしは おともだちに いいました。  
「なんですか」と おともだちの でんでんむしは ききました。  
「わたしは なんといふ ふしあはせな ものでしょう。わたしのせなかの からの なかには かなしみが しばしば つまづいて いるのです」  
と はじめの でんでんむしが はなしました。  
すると おともだちの でんでんむしは いいました。  
「あなたばかりでは ありません。わたしのせなかにも かなしみはい つぱいです。」  
… 中略 …  
かうして、おともだちを じゅんじゅんに たづねて いきましたが、どの ともだちもおなじことを いふのでありました。  
とうとう はじめの でんでんむしは きがつかしました。  
「かなしみは だれでも もつてゐるのだ。わたしばかりでは ないのだ。わたしは わたしのかなしみを こらへて いかなきや ならない」  
そして、この でんでんむしは もう、なげくのやめたのであります。

▼短い短い作品ですが、実に雄弁な作品です。共観を覚えずにはいられません。

でんでんむし、むしろ人間は、誰もが心に悲しみを抱いて生きています。

山本周五郎は「悲しみによる連帯」という表現を採っています。裏長屋に住む貧しい人々には、共有する目的意識や、楽しみはありません。彼らが共有し、それ故に連帯し慰められるのは、悲しみなのです。

まあ乱暴な説明ですが、そんな風なことを繰り返しています。

▼私たち玉川教会は、信仰共同体です。礼拝共同体です。そして、私たちには共有する喜びも、目的意識もあります。大変に恵まれたことです。

しかし、私たちには、もう一つ共有するものが存在します。

それが悲しみではないでしょうか。

▼旧約聖書を読み、考えさせられるのは、旧約の民に与えられた苦難の大きさです。神さまの民、神に選ばれた特別の民ならば、もう少し、幸運なことがあって良いのではないかと、実際は不運不幸の連続ではないかと、そんなことを思わされます。

このことは、旧約聖書後のユダヤ人の歴史にも当て嵌まります。

そして、イエスさまにも、初代教会の歩みにも重なります。

そうして私たち玉川教会の歩みにも重なるのではないのでしょうか。

玉川教会の礼拝堂には悲しみが溢れています。そのことを伝えに、隣の教会に行きましょう

か。お隣の教会の礼拝堂にも悲しみがいっぱいでしょう。

▼十字架の出来事、十字架の悲しみこそが、信仰者の慰めです。

ヨハネ福音書 16章 20～21節。今日の箇所直前です。

『20:はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。』

21:女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。

22:ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない』

▼ 33節をご覧ください。

『これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている』

『あなたがたには世で苦難がある』

このことを、イエスさまはご存じです。『あなたがたは悲しむ』そのことを、イエスさまはご存じです。

悲しんではならないとは言われません。悲しむのは当然なのです。人間は悲しいのです。しかし、でんでんむしが、「かなしみは だれでも もつて ゐるのだ。わたしばかりではないのだ」と気付いて、「わたしは わたしの かなしみを こらへて いかなきや ならない そして、この でんでんむしは もう、 なげくのを やめた」

このように、私たちは、私たちの悲しみをご存じの方に出遭い、慰められるのです。もう悲しむ必要はありません。もう悲しんではられません。

▼ 33節。もう一度引用します。

『これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている』

以前の説教で、何時だったか調べるのが困難な程昔ですが、小説家・原民喜について触れました。ヒロシマの惨状を目の当たりにし、また、最愛の妻を失った原民喜は、「死んでいった者への悲しみによって貫かれなければならない」と書いています。「死んでいった者への悲しみによって貫かれ」ること、簡単に言えば、悲しみを抱き続けること、それが残された者の果たすべき役割なのだと言うのです。「死んでいった者への悲しみ」を忘れてならば、「死んでいった者」は全く滅びててしまう。存在しなくなってしまう。そんな意味合いです。… 原民喜が、三鷹駅近くで、鉄道自殺という非業の死を遂げたのも、全くこの思いからでしょう。

▼ 『あなたがたには世で苦難がある。』

しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている』

主の十字架の出来事という「悲しみによって貫かれ」者は、その悲しみによって、主の十字架と結ばれ、その結果は、勇気を与えられ、悲しみに勝つことが出来ると記されています。

その根拠は、32節にも記されています。

『あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、

わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。

しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ』

悲しみは、その悲しみを共有する者が存在しないという、更なる悲しみによって増幅されます。でんでんむしのよう、悲しみはわたし一人のものではないと知ることで、悲しみは癒や

されます。

▼27節。

『父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである』  
悲しむ者のために悲しむことは、既に愛です。愛の業です。

でんでんむしのように、悲しみを抱えて生きる惨めな存在のために、悲しんで下さるのが、イエスさまでした。

しかし、人間は、弟子たちも含めて、イエスさまの悲しみを、自分の悲しみとすることは出来ずに、逃げ出しました。

もう一度32節。

『あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている』

人間は、弟子たちも含めて、イエスさまを『ひとりきりに』したのです。それが、十字架の出来事です。

▼今日は後の方から遡って読んでいますが、ここは25～26節の順で読みます。25節。

『わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。  
もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る』  
これは内容的に28節と重なります。

『わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く』

十字架の時が来ます。十字架とは、神の時と人間の時が交差する時であり、神の国が、人間の国と交わる場です。

▼26節。

『その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。  
わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない』

『わたしの名によって』つまり、イエス・キリストの名前で、神に祈ることが許されたのです。祈る時に、祈る人は既に一人ではありません。

それが信仰者に与えられた慰めであり、救いなのです。

祈りは必ず聞かれる、そんな風に言う人があります。その通りかも知れませんが、祈ることが出来る、祈りを捧げる人がいる、このことこそが、信仰者に与えられた慰めであり、救いなのです。

▼『あなたがたには世で苦難がある』という言葉は、今、2000年の時を超えて、私たちの耳にも届きました。

そして、2000年の時を経た今日でも、この言葉は、全く100%、私たちの現実に、信仰の現実に、当て嵌まるのです。

現代には、迫害・弾圧という程のことはないかも知れません。

しかし、誘惑、これは、今日でも、私たちの心に、時に囁き、時に歌いかけ、時には嘆き悲しみ慟哭によって、私たちの心に働きかけて来ます。そしてまた、時には恫喝します。

▼12弟子は、暴力に屈したのではありません。恫喝されたとも記されていません。お金や地位の約束という囁きに乗ったのは、イスカリオテのユダ一人です。他の11人は、イエス様の十字架（の死）という出来事そのものに、躊躇い、躓き、屈したのです。

私たちの躊躇いも躓きも、おそらくは、イエス様の十字架（の死）という出来事そのものから、惹き起こされるのです。

そして、私たち自身の、私たちが愛する家族や友人たちへの思い、（死）という出来事その

ものから、惹き起こされるのです。

▼『あなたがたには世で苦難がある』と仰った方は、『勇気を出しなさい』とも、仰いました。私たちの現実を御存知なのです。だから、そのように仰ったのです。弟子たちが、躊躇し、躓き、挫折することを御存知だったのです。

この方は、今日の箇所を含む新約聖書を通じて最も長い16章の説教を語られ、そして、新約聖書を通じて最も長い17章の祈りを神に捧げられました。

説教でも、お祈りでも、十字架の死が強く意識されています。そのための祈りです。但し、ご自分のための祈りではなくて、残された者のための祈りです。

残された者の、心の平和を祈るものです。

▼『これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである』。イエス様の説教＝教えも、祈りも、『あなたがたが』つまり、12弟子が、教会が、『平和を得るため』のものなのです。

更に言うならば、イエス様が十字架の死への道を歩まれたということ、そのことが、『平和を得るため』のものなのです。

▼『勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている』。これが私たちの平和の根拠です。私たちの平和のために、十字架の死への道を歩まれた方が、十字架に滅びたのではなくて、十字架の死に勝利し、その所をこそ、信仰の、救いの印とされたのです。

私たちは、2000年の歴史を通じて、十字架を、救いのシンボルとして来たのです。その通りなのです。

今日、信仰にも教会にも何の関係もない若者が、単なるアクセサリとして十字架を肌に付けています。そして、私たちキリスト者は、この十字架を捨ててしまうのでしょうか。今こそ、私たちは、救いの印としての十字架を、心に刻み、時に高く掲げて、勇気を出して歩まなければなりません。

それが私たちの平和への道なのです。私たちが住むこの世界にとっても、私たちの心の中の問題としても、それが私たちの平和への道なのです。

▼勇気を出すには根拠が要ります。根拠がなければ空元気に過ぎません。根拠とは、イエスさまの言葉です。

『あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい』、イエスさまがこのように仰っているのです。この言葉が根拠なのです。

つまり、私たちが置かれている、元気が出ない客観的状況、私たちの心の内、そういうものがあります。そのことをイエスさまは、十分に御存知であります。しかし、イエスさまは仰っているのです。『あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい』

平和の根拠も、讃美の根拠も、同様です。

イエスさまは、不安におののく者に『平安でいなさい』と仰いました。

この言葉が与えられた以上、もう、不安でいることはないのです。

迷い道で、確かな導き手に出会ったのです。

▼私たちは背中に悲しみを背負って生きています。しかし、その悲しみでもって、イエスさまに出会い、信仰の友に出会い、救いを見出すことも出来ます。

私たちの人生は、悲しみによって貫かれています。私たちの信仰そのものが悲しみによって貫かれています。しかし、その悲しみこそが、十字架の言葉によって、清められ、栄光へと変えられるのです。

十字架の言葉を見上げる者には、信仰による連帯が与えられます。十字架の悲しみによる連帯こそが、他のどんなものによる連帯よりも、慰めと喜びに満ちた連帯へと変えられるのです。